政大日本研究【第四號】
2007年1月，頁

「テ」形再探

—根據生成文法觀念的テ形用法分類—

吉田妙子*

摘要

有關「テ」形的用法分類並非越細越好，而必須有一定的根據才行。

「テ」形本來就具有表「完了」相，故筆者認為其基本用法為「繼起」。具有「繼起」關係的前件和後件順序不可對換，此外前件和後件具有內在的關連，還有前件必須是「有界的」。

「テ形」亦可表「並列」，前件和後件順序可調換，但不具有內在的關連。表「原因、理由」的テ形在「繼起」的用法當中，前件和後件具有因果關係，且後件必能表非意志性的事態。

在「繼起」用法中表「付帶狀態」的「テ形」，前件事象和後件事象的發生時間一部分或全部構成重疊。

在過去先行研究被列為「テ形」用法的「對比」「手段」「逆接」「結果」等分類項目，筆者認為是在以上的各種用法中，滿足某種語境或語用條件時所發生的衍生用法，而非獨立的項目。

關鍵詞：テ形、作格動詞、非作格動詞、非受格動詞、活動動詞、完成動詞、 瞬成動詞、再歸動詞、限界性、非限界性、語彙概念結構

* 政治大學日本語文學系 副教授

テ形再考

—生成文法の観点によるテ形の用法分類—

吉田妙子*

要旨

テ形文の用法分類は、細かければ細かいほどいいというものでなく、一定の基準に基づいて行わなければならない。

まず、テ形には本来完了のアスペクトが具わっていると分析できる故、基本の用法は「継起」であると考える。「継起」は前件と後件が不可逆であり、また前件と後件が内的連関を持っている。さらに、前件は有界的でなければならない。

「並列」は、前件と後件が可逆的であり、内的関連を持たない。「原因・理由」は、「継起」の中で、前件と後件に因果関係が認められるものである。後件は非意志性のものに限られる。

「付帯状態」は、「継起」の中で、前件事象と後件事象の生起時間の一部または全部が重なっているものである。

従来の分類項目であった「対比」「手段」「逆接」「結果」などは、以上の用法の中で、ある文脈や語用条件が満たされた時に起こる派生的用法と考え、独立した項目とは考えない。

キーワード：テ形、対格動詞、非対格動詞、非能格動詞、活動動詞、到達動詞、達成動詞、再帰動詞、有界性・非有界性、語彙概念構造

* 政治大学日本語文学系 副教授

政大日本研究【第四號】
2007年1月，頁

Re-examination of the -Te Form
—Use Classification of the -Te Form Based on the Concept of Generative Grammar
——

YOSHIDA, Taeko*

Abstract

Regarding the use classification of the -Te form, it is not necessarily considered 'the more detailed, the better'; it has to be done based on certain criteria.

First of all, the realis aspect is considered inherent in the -Te form, so 'to succeed' is considered the basic use of the -Te form. When it means 'to succeed', the sequence of the preceding event and the succeeding event is irreversible; and both are internally related. Moreover, the preceding event has to be telic.

When it means 'Parallel', the preceding and succeeding events are reversible, and both have no internal relations. Among the different meanings that 'to succeed' contains, when it means 'cause/reason', the relation of cause and result is recognized, therefore, the succeeding events are restricted to those which have non-will characteristics.

Besides, among the different meanings that 'to succeed' contains, when it means 'incidental state', the occurring times of the preceding and succeeding events overlap partially or totally.

Those traditional classification items, such as 'comparison', 'means', 'gyakusetu (connection of two contrary phrases)', and 'result', are considered derivative uses which only occur when the contextual or pragmatic conditions are satisfied, so they cannot be considered independent items.

Keywords: -Te form, accusative verb, unaccusative verb, unurgative verb, activity verb, achievement verb, accomplishment verb, reflexive verb, telic, atelic, Lexical Conceptual Structure (LCS)

* Associate Professor of Department of Japanese, National Cheng-Chi University

テ形再考

—生成文法の観点によるテ形の用法分類—

吉田妙子

１．分類規則の一般化の課題

筆者は1993年から1997年にかけて、テ形の研究をした。その後、生成文法を学び始め、新たな観点でテ形を再整理する機会を得た。

テ形の用法分類は細かい点を除いて、先行研究ではどれも似たり寄ったりであるが、おおむね次のようなものになろう。

（１）a　コノ椅子ニ座ッテ、アノソファーニモ腰カケテ、アソコノスツールニモカケテミタ。(「並列」)

b　彼ハコノ椅子ニ座ッテ、彼女ハアノ椅子ニ座ッタ。(「対比」)

c　彼ハコノ椅子ニ座ッテ、本ヲ読ンデイタ。(「付帯状態」)

d　彼ハコノ椅子ニ座ッテ、本ヲ広ゲタ。(「継起」)

e　彼ハコノ椅子ニ座ッテ、体ヲ休メタ。(「手段」)

f　コノ椅子ニ座ッテ、体ガ痛クナッタ。(「原因・理由」)

g　コノ椅子ニ座ッテ体ガ痛クナラナイナンテ、随分タフダネ。(「逆接」)

h　コノ机ハ、コノ椅子ニ座ッテ胸ノ高サダ。(「結果」)

このような分類を見るに際して、最も根本的にして不可欠な二つの問題が論じられていないような気がする。

一つは、どの分類にしろ、「何故我々は、このような分類ができるのか」という認知の問題である。我々は何故、（１）a は「前件と後件[1]が並列の関係」、b は「前件と後件が対比の関係」、c は「前件が

[1] 前稿まではテ形節を「前項」、主節を「後項」と呼んでいたが、この呼称は「項構造」の「項」（argument）と紛らわしい故、本稿では「前件」「後件」と呼ぶ。

後件の付帯状態」、ｄは「前件が後件に継起」、ｅは「前件が後件の手段」、ｆは「前件が後件の原因」、ｇは「前件と後件が逆接関係」、ｈは「後件が前件の結果」と、直感的に分類できるのであろうか。

二つ目は、我々が学生の誤用に出会った時、何故「これは誤用だ」と感じられるのであろうか、ということである。

第一番目の問題と第二番目の問題は、実は同じ「ネイティブの文法生成」の問題である。言語の分類とは、分類を行う者の個人的な語感によって行われてよいはずがなく、統語的なものにせよ、語彙的なものにせよ、普遍的な基準がなければならない。また、何かの文を「誤用だ」と言う時には、規範を示すことができなくてはならない。そして、分類の基準と言語使用の規範は、共に同じ一般原則から出発しているはずである。

本稿は分析の方法を新たにし、具体的な問題を論じながら、テ形の用法分類の一般化を目指すものである。

２．「並列」と「継起」の連続性

２－１．テのアスペクト性

テはもともと古語の完了の助動詞ツの連用形とも言われることからも、テ形は本来完了のアスペクト性を具えているのではないかと思われる[2]。そして、「並列」「付帯状態」「原因」等の用法は、前件と後件に何らかの語用的事情や統語的事情が生じた時にそのように判定されるものではないかと考えられる。それは、同じく用言の中止形と言われる連用中止形と比べてみればわかるのではないか。

日本語の活用語には、二つの中止形がある[3]。一つは「Ｖ-Te」[4]の

[2] 例えば、久野（1983）もそのように考えている。

[3] 国文法ではどちらも連用形と位置づけられ、テ形は連用形音便とされている。

[4] Ｖは動詞連用形。母音動詞（国文法で言う一段動詞）は語幹イコール連用形であるが、子音動詞（国文法で言う五段動詞）は音便を伴う。-Te は本稿で言う接続語テのことであり、子音動詞はテの前で音便変化するが、-te が無標の形であることを表すため、大文字の-Te で表した。また、活用を持つ語は形容詞もあるが、動詞の方が無標と捉え、Ｖの記号にした。なお、母音動詞・子音動詞という名称は、ブロック（1975）による。

形（本稿で言う「テ形」）、もう一つは「V(i)」[5]の形（いわゆる「連用中止形」）である。動詞なら「行って」と「行き」、形容詞[6]なら「寒くて」と「寒く」、形容名詞[7]なら「静かで」と「静かに」になる[8]。

この両者の形態論的な考察を進めると、両者が相補分布をなしている言語現象がいくつも観察されるのである[9]。

ｉ.「V-Te」の形や「V(i)」の形を用いて複合動詞を作る場合、次のような差異が見られる。

（２）　V-Te：書イテ-イル・アル・ヤル・クレル・モラウ・オク・ミル・シマウ・イク・クル・ミセル。

V(i)：書キ-始メル・終ワル・続ケル・カケル・出ス・切ル・アゲル・込ム・入レル・ツケル・加エル・足ス・損ナウ・マクル・ナグル・散ラス・写ス・直ス・下ロス・記ス・送ル・・・

「V-Te」は、11 個の補助動詞と結びつくだけで、始メル・終ワル・続ケルなどのごく基本的なアスペクト補助動詞と結びつく

---

5 Vは動詞連用形。母音動詞は語幹イコール連用形であるが、子音動詞の連用形語尾は必ず-i 音を伴う故、括弧に入れて(i)と表した。

6 国文法で「形容詞」と言われる、連体形語尾がイで終わる形容詞。

7 国文法で「形容動詞」と呼ばれる、連体形語尾がナで終わる形容詞。本稿では、この品詞は形態的に名詞的な性格が強いので、東呉大学客員教授湯廷池博士に倣って「形容名詞」という名称を用いる。

8 形容詞・形容名詞のテ形（A-Te、AN-Te）と連用中止形（A(i) 、AN(i)）の判定は、後に「タマラナイ」が接続可能なものを「V-Te」、「ナル／スル」が接続可能なものを「V(i)」とした。

形容詞　:「田舎の冬は、寒くてたまらないです。」（「A-Te」）
「田舎は、寒くなりました。」（「A(i)」）

形容名詞 :「田舎の冬は、静かでたまらないです。」（「AN-Te」）
「田舎は、静かになりました。」（「AN(i)」）

9 ブロック（1975）は日本語の語法についてすぐれた論考を残しているが、「V-Te」の形を「動名詞」、「V(i)」の形は「不定詞」と一般化している。即ち、「動名詞」とは「ある行為が起こっていること、ある状態が存在していること」で、「個々の脈絡の場合で明確な意味になる」。英語では-ing の形であるが、日本語ではテ形がこれに相当する。何故なら、「V-Te」の形はイルを伴って進行形になる、つまりアスペクトを持っているからである。

また、「不定詞」とは「ある行為の生起、ある状態の存在」であるが、「実際の発生や存在には言及しないで、単に述べるだけであって、個々の脈絡で明確な意味をもってくる」とし、さまざまな文型の構成要素として働く、と言う。例えば、英語では「go to see you」は日本語では「あなたに会いに行く」であるから、「会い」の形が不定詞である、と言う（ｐ.１～24）。

ことはできない。

（３）　*論文を書いて［始めた／終わった／続けた］。

では、まるで論文を書いた後で何か別のことを始めたり、終えたり、続けたりするような印象を受ける。これは、「Ｖ-Te」の形がすでにアスペクトを内包しているということではないだろうか。

ⅱ.「Ｖ(i)」の形を２つ並べて反復動作を表した場合、

（４）a　泣き泣き話す

b　頭を掻き掻きわびる

c　遠慮しいしい食べる

d　鉛筆をなめなめ書く

などは、ナガラ節と同値で、主節動詞に付随するスタティックな反復動作（「付帯状態」）を表す。しかし、「Ｖ-Te」の形を２つ並べて反復動作を表した場合は、

（５）a　泣いて泣いて涙が枯れた

b　斬って斬って斬りまくる

c　褒めて褒めて褒め殺す

d　勝って勝って勝ち抜くぞ

など、同じ反復動作であってもダイナミックな前進的連続であり、しかも後続文で動作の極点に到達することが求められる。これは、テの持つアスペクト性の故ではないだろうか。

ⅲ.「Ｖ(i)1＋Ｖ(i)2」の形を取る複合名詞は、動詞に復元すると「Ｖ(i)1」を「Ｖ-Te」の形にしなくてはならないものがある。

（６）a　立ち読み → 立って読む（*立ち読む）

b　立ち見　→ 立って見る（*立ち見る）

c　添い寝　→ 添って寝る（*添い寝る）

d　買い食い → 買って食う（*買い食う）

e　行き帰り → 行って帰る（*行き帰る）

f　洗い張り → 洗って張る（*洗い張る）

g　切り売り → 切って売る（*切り売る）

これらの例は、いずれも「Ｖ(i)1」が完了した後で「Ｖ(i)2」を開

始するというタイプの複合語である。（ａ～ｃは「付帯状態」、ｄ～ｇは「時間的継起」を表している。）この場合、動詞の形にすると「Ｖ-Te」の形を取らざるを得なくなるのは、「Ｖ(i)1」と「Ｖ(i)2」の相対的テンスを明示しなくてはならないからである。

それに対して「Ｖ(i)1＋Ｖ(i)2」の形を取る複合動作名詞は、

（７）ａ　買い食い：買ってからすぐ食べる

ｂ　立ち食い：立った状態で食べる

ｃ　盗み食い：人の目を盗むように食べる

ｄ　飲み食い：飲んだり食ったりする

ｅ　売り食い：財産を売ることによって生活する

など、「Ｖ(i)1」と「Ｖ(i)2」のアスペクト関係が異なったものであっても、一様に「Ｖ(i)」で結び付けてしまう。これは、「Ｖ(i)」はアスペクトを捨象する力があるが、「Ｖ-Te」はアスペクトを回復させる力がある、ということではないだろうか。

ⅳ.「Ｖ(i)」と「Ｖ-Te」の副詞的用法が、意味が違うことがある。

（８）ａ　課長を思い切り殴った。

ｂ　課長を思い切って殴った。

ａの「思い切り」は「殴る」という主節の動詞を修飾する様態副詞であるが、ｂの「思い切って」は主動作を修飾する語ではなく、主動作以前の「決意を固める」という別の動作と受け取れる。

以上の理由により、「Ｖ-Te」は完了のアスペクトを内包しているのではないかと考えられるのである。

２－２．項構造によるテ形「継起」の分析

「付帯状態」も「継起」「原因・理由」も、それぞれ前件事象が後件事象に先行する、という共通点を持っていることから、テ形の用法は、前件が完了した後に後件が開始する、というパターンが基本になるであろう[10]。

[10] 事態の完了のあり方というのは、むろん動詞によって違うので、テ形で接続した場合、前件と後件の意味関係も違ってくる。

では、テ形による「継起」とはいかなる性質を有しているのだろうか。同じ「継起」を示すテカラと比べてみよう。

(9)a　夏休ミハ、アメリカへ行ッテ、従兄弟ニ会ッタ。

b　夏休ミハ、アメリカへ行ッテカラ、従兄弟ニ会ッタ。

上のaを見た場合、「従兄弟はアメリカにいる」と感じられるが、bの方は逆に「従兄弟はアメリカ以外の場所にいる」と感じられる。これは、何故だろうか。

テカラは内的連関のない二事象の恣意的な順序を表わす。

(10)a　西洋人ハスープヲ飲ンデカラ主食ヲ食ベルガ、中国人ハ主食ヲ食ベテカラスープヲ飲ム。

b　コノ白イ薬ヲ飲ンデカラ、ゴ飯ヲ食ベテクダサイ。ソシテ、ゴ飯ヲ食ベテカラコノ青イ薬ヲ飲ンデクダサイ。

このような二事象の順序はまったく意図的なもので、自然の順序とは言い難い。それ故、(9)bは、

(9')b　夏休ミハ、従兄弟ニ会ッテカラ、アメリカへ行ッタ。

としても、それは話者の恣意で順序が逆にされただけで、夏休みにこの二つのことを行ったことに変わりはない。これら二事象はまったく内的連関のないことだから、順序は可逆的なのである。

これに対してテ形で結ばれた二事象は、前件の結果を受けて後件が展開される、という内的連関を持つ。

(11)a　彼女ハ台所へ行ッテ、料理ヲ作ッタ。

b　?彼女ハ台所へ行ッテカラ、料理ヲ作ッタ。

aが自然の経緯を示すのに対し、bはいかにも不自然であろう。

さて、何故(9)aで「従兄弟はアメリカにいる」と感じられるか、という問題に戻る。これには、項構造[11]を考えることが有効である。

---

[11] 動詞、形容詞などの活用語は、必ず項を持つ。
Ag(Agent):動作主。主体的に動作を起こす者で、人及び人に準ずる有情物。
Th(Theme):対象。意志を持たず、被動的な動きをするもの。非情物の場合も、有情物の場合もある。
Ex(Experiencer):経験者。人および人に準ずる有情物。自分の主体的意志によらない動きをするもの。
Go(Goal):着点。場所名詞の場合も人名詞の場合も物名詞の場合もある。

（９）a の前件動詞「行く」の項構造は、［Ag,Go(Lo)］で、必ず着点の場所名詞を伴う。また、後件動詞「従兄弟に会った」の項構造は［Ag,Go(Person)］であるが、任意項[12]として「どこで」「いつ」「どのように」「何のために」などが考えられる。前件の動作の結果、話者はアメリカにいるのであるから、後件の動作の行われる場所、つまり「どこで」という任意項は「アメリカ」で埋められてしまう。後件に欠けている場所項を、前件にある場所項で補充してしまうのである。また、前件に欠けている「何のために」という目的項を後件の「従兄弟に会う」で埋める、という作業を同時に行っているとも言えるだろう。

このことは、久野（1983）の例を挙げれば、いっそうよくわかる。

(12)　太郎ハ上着ヲ脱イデ、ハンガーニカケタ。

後件で、何をハンガーにかけたかといえば、もちろん「上着」である。前件動詞「脱ぐ」の項構造［Ag,Th］は満たされているが、後件動詞「かける」は、項構造［Ag,Th,Go(Lo)］のうち、Th（対象）が欠けている。そこで、欠けている対象項を前件動詞の対象項「上着」で補って読んでしまうのである。これを、仮に「項補充作業」と呼んでおく。

（９）c　夏休ミハ、アメリカへ行ッテ、富士山ニ登ッタ。

という文を見ると、我々はまず「荒唐無稽な文だ」と感じてしまう。それは、後件に欠けている場所項を、前件にある場所項「アメリカ」で埋めたり、或いは前件に欠けている目的項を後件の「富士山に登る」で埋めようとすると、常識的にアメリカにはあり得ない「富士山」という語彙情報と衝突して混乱するからである。しかし、

（９）d　夏休ミハ、アメリカへ行ッテ、ロッキー山脈ニ登ッタ。

So（Source）：起点。場所名詞の場合も人名詞の場合も物名詞の場合もある。
Lo（Location）：場所。
Ca（Cause）：原因。
例えば、動詞「食べる」なら、動作主と動作対象を必ず持つから、項構造は［Ag,Th］となる。形容詞は項に Ag を持つことがなく、Th、Ex のみになる。

[12] Ag、Th、などが必須項であるのに対し、動作の行われた場所・時間・理由・目的などを表す語は、任意項（または付加詞）と言われる。

などとなれば、「項補充作業」と語彙情報が語用上のミスマッチを起こさずにすむので、自然性を回復するのである。同様に、

(12') 太郎ハ上着ヲ脱イデ、飲ンダ。

などのような文では、後件の「項補充作業」において、補充すべき項が前件中の「上着」とは常識的に考えられない故、①非文とみなすか、②「飲んだ」対象が文脈中に前提されていると考えるか、③「飲む」という行為の最も無標なものである「飲酒」と解釈するか、いずれかの処理をせざるを得ないであろう。

この「項補充作業」を中心に、テ形の「継起」の用法を整理する。

①「項補充作業」ができるテ形文の「継起」用法

前件の結果が残りやすく、しかも前件と後件の相互の「項補充作業」において語用的なミスマッチがない文[13]。

(13) a 鯵ヲ3枚ニオロシテ、(おろした鯵を) タタキニシタ。

b 古イワンピースヲホグシテ、(ほぐした布で) 娘ノスカートヲ縫ッタ。

c 台湾ヘ来テ、(台湾で) 初メテ中国語ヲ勉強シタ。

②「項補充作業」が必要でないテ形文の「継起」用法

前件・後件の前後関係が常識的・語用的に決まっている文[14]。

(14) a サテ、風呂ニ入ッテ寝ルカ。

b 顔ヲ洗ッテ、ゴ飯ヲ食ベル。

③「項補充作業」ができないテ形文。

前件・後件相互の「項補充作業」において、語用的なミスマッチが発生する文は、「継起」の用法が成立しない。

(9) c *夏休ミハ、アメリカヘ行ッテ、富士山ニ登ッタ。

以上、テ形による「継起」の文は前件と後件の間に統語的連関があることがわかった。

---

13 「先行事象の結果が残りやすい動詞」とは、寺村 (1987) などの言う作成動詞、破壊動詞、移動動詞などであるこれらは総じて「達成動詞」である。「達成動詞」については、4で述べる。

14 この「常識的・語用的に前後関係が決まっている文」にしても、実は前件の動詞に「有界性」という条件がある。動詞の有界性については、5で述べる。

２－３.「継起」と「並列」の分類

では、「並列」の用法はいかにして生まれてくるのだろうか。

テ形の前件事象と後件事象には、自然連続性がある。前件と後件の動作主が同じ場合、前件事象と後件事象が常識的な順序からあまりにもかけ離れていたり、後件の中に前件とミスマッチを犯すような語彙を見出したりすると、我々はそれに非文性を感じる。(９)ｃのような例の場合、無理して「同一人物の非連続的な動作」(アメリカ旅行と富士登山という二つのことを夏休みにした）という等位構造と解するにしても、

(９’)ｃ　夏休ミハ、アメリカヘ行ッテ、富士山ニ登ッタ。ソレカラ、アルバイトモシタシ、ボランティアニモ参加シタ。イロイロナ事ヲヤッテ充実シタ夏休ミダッタ。

など、よほどの文脈がないと無理であろう。(この場合、前件動詞と後件動詞の間の相対的テンスは失われる。) つまり、前件と後件の動作主が同一主体である場合は、文脈に支えられない限り、二つの動作を「並列」と受け止めるのは無理があり、「継起」と受け止める方が自然な捉え方であると言える。

これに対し、前件と後件の動作主が異主体の場合は、無理なく等位構造と受け止められる。異主体であれば、同時に行為することも可能だからである。問題の(９)ａも、

(９”)ｃ　夏休ミハ、太郎ガアメリカヘイッテ、次郎ガ富士山ニ登ッタ。

と、動作主を異主体にすれば、問題はなくなるわけである。

さて、前件と後件の動作主が異主体または異テーマで、しかも行為のスケールが同じ場合、「対比」の用法が発生する。行為のスケールとは、二つの行為が同等の比重で語られているかどうかである。（同比重であるからこそ、等位構造になるわけである。）

(15)ａ　太郎ガ庭ヲ掃イテ、花子ガ雑巾掛ケヲシタ。

ｂ　晴レノ日ハ畑ヲ耕シテ、雨ノ日ハ読書ヲスル。

などは、「庭を掃く」と「雑巾掛けをする」は掃除の行為スケールとして同比重だと考えられるし、「畑を耕す」と「読書をする」は生活上の二つの中心と考えられる故、「対比」の用法と感じられる。しかし、最もわかりやすいのは、前件と後件の動詞が同じ場合である。

(16)　おじいさんが山へ芝刈りに行って、おばあさんが川へ洗濯に行きました。

この場合、同時発生した二つの事態をいっぺんに述べ立てることは不可能であるから、どちらを前に置き、どちらを後に置くか、述べ立ての順序を選ばなくてはならない。その際、多くの人が取る順序は、「無標のものが先、有標のものが後」という配置であろう[15]。(16)の文では、社会通念として男性の方が女性よりも無標の存在であるから「おじいさん」が前に置かれているに過ぎず、

(16')　おばあさんが川へ洗濯に行って、おじいさんが山へ芝刈りに行きました。

と言っても、真理値は何ら変わらないので、いっこうに差し支えない。即ち、「並列」(「対比」を含める)の特徴は、「前件事象と後件事象の可逆性」なのである。何故なら、「並列」とは、時間関係が捨象されているからである。これは、「継起」の用法と大きく一線を画する性質である。

それ故、

(17) a　太郎ガ木ノ上カラ柿ノ実ヲ落トシテ、花子ガ(柿ノ実ヲ)籠ニ受ケタ。

b　太郎ガ紙ヲソロエテ、花子ガ(紙ヲ)ホッチキスデ止メタ。

などという場合は、異主体の並行動作ではあるが、語用的関係に支

[15] 有標(marked)、無標(unmarked)。例えば、学校で女子が非常に少ないクラスの場合、教師がクラス名簿に男子・女子を識別するためのマークをつけるとしたら、女子をマークしていく方が、男子をマークしていくより、遥かに効率がいいだろう。(マークのついているのが女子、ついていないのが男子。)この場合、マークのついた女子は「有標」、ついていない男子は「無標」である。このように、ある2つのグループを比べて、より普遍的で代表性のある方を「無標」、特殊的で目立つ存在の方を「有標」と言う。

えられて、不可逆的である。さらに、これらの文では「項補充作業」が可能な故、「継起」と考えられる。また、同一主体であっても、

(18)　一年間休暇ガアッタラ、英会話ヲ勉強シテ、海外旅行ヲシテ、コンピューターノ学校ニモ行キタイ。

などと、思いつくままを列挙したようなテ形文は、「並列」である。

「継起」を「並列」から分かつファクターは、前件と後件の動作主が同一主体か異主体か、ということではなく、「前件と後件の不可逆性」である。しかし、この不可逆性が自然連続性に支えられていない場合は、「項補充作業」が行われ得ることが、自然から言語に投影された「不可逆性」の制約である。このことを、本章で確認しておきたい。

３．動詞分類から見る「手段」と「原因」の連続性

仁田（1995）も言うように[16]、前章で述べた「継起」の中で、前件と後件に因果関係が認められるものが「起因的継起」である。

西欧語（主に英語）においては、関係文法の方面から Perlmutter 等による動詞の分類が進められてきた[17]。Perlmutter（1978）は、従来の自動詞・他動詞という二分法ではさまざまな文法現象を説明できない、として動詞を整理し、自動詞をさらに二つに分け、対格動詞（accusative verb）、非対格自動詞（unaccusative verb）、非

[16] 仁田（1995）では、「継起」はたんに時間系列に従って事象を並べた「時間的継起」と、前件と後件に因果関係が認められる「起因的継起」に細分されている。仁田（1995）は、前件（テ形節）と後件（主節）の時間的関係に着目して、テ形の基本用法を「並列」「付帯状態」「継起」の三つに大別し、「継起」をさらに「時間的継起」と「起因的継起」に細分した。「並列」は相互に関係を持たない二事象の併記、「付帯状態」は前件と後件の一部または全部が時間的に重なって、前件が後件の副詞節となっているもの、「時間的継起」は二事象が相前後して生じるもの、「起因的継起」は「時間的継起」の中で前件と後件が因果関係をなしているもの、である。仁田（1995）の「継起」の中には、森田（1988）の「順序」「手段」「逆接」「原因・理由」「結果」が含まれている。また、「対比」「手段」「逆接」「結果」などが分類項目として挙げられていないということは、仁田はそれらが上記四類に包摂されると考えているのであろうと思われる。

[17] この分類に関して、主に関係文法や生成文法の立場から議論が投げかけられ、特に非対格動詞について議論が集中している。その議論を受けて、日本語の分野でも非対格動詞と非能格動詞を分類・検証するさまざまなテストが考え出されている。詳しくは、高見・久野（2001）参照。

能格自動詞（unergative verb）、能格動詞（ergative verb）の、つごう四種に分類した。分類は、以下のようである[18]。

	動詞の自他	意志性	細分	項構造と項の意味役割[19]	例
対格動詞	他動詞	有		［Ag,Th］ Ag；外項，主語 Th；内項，目的語	飲む，読む 見る，壊す 焼く，等
非能格動詞	自動詞	有	意図的行為を表す動詞	［Ag］ Ag；外項，主語[20]	行く，走る いる，等
		無	生理現象を表す動詞[21]	［Ex］ Ex；外項，主語	疲れる，咳をする，等
非対格動詞[22]	自動詞	無		［Th］ Th；内項，主語	ある，着く 焼ける，等
能格動詞[23]	自他両用動詞	無	自動詞用法	非対格［Th］	増す，開く 閉じる，等
		有	他動詞用法	対格［Ag,Th］	

以上の分類は、項構造に視点を当てた分析である。対格動詞は内項を目的語として持ち、非対格動詞は内項を主語として持ち、能格動詞は内項を主語・目的語のいずれとして持つこともでき、非能格

18 Perlmutter の動詞分類は、高見・久野（2001）、p.12～13 による。

19 内項とは、常に動詞に伴い、動詞が成立するのに不可欠な項。日本語では通常、ヲ格目的語および有対自動詞の主語。「非対格動詞の主語は基底構造では目的語であり、それ故内項である」という、いわゆる「非対格仮説」に基づく。
外項とはそれ以外の必須項。
内項、外項が「必須項」といわれるのに対し、それ以外の、いわゆる副詞句は「任意項」であり、「付加詞」と呼ばれる。
意味役割とは、それぞれの項が果たす役割。

20 非能格動詞の主語は外項であるが、「非対格動詞の主語は基底構造では目的語であり、それ故内項である」という、いわゆる「非対格仮説」に基づく。

21 生理現象を表す動詞は、英語では非能格動詞とされているが、日本語の生理動詞の多くは「くしゃみをする」などヲ格目的語を取る構成になっているので、非能格動詞とすることには異論がある。

22 Perlmutter（1978）では、非対格動詞を、a．形状動詞、b．対象（Theme）及び被動者（Patient）を主語に取る動詞、c．存在や出現を表す動詞、d．五官に作用する非意図的現象を表す動詞、e．アスペクト動詞、に分けている。

23 本稿で言う非対格動詞を、能格動詞と命名する人もいる。

動詞は内項を持たない。

以上の分類によれば、ほとんどすべての先行研究において「意志性の動詞」と呼ばれているものは、「動作主（Agent）を主語に取る動詞」と明確に定義することができる。この際、生理動詞は経験者（Experiencer）主語を取るので、意志性の動作とは見なされない。同様に、動詞の受身態、可能態も、主語が有情物であってもそれは動作主でなく、経験者（或いは、被動者：Patient）とされるので、非意志性の動作と見なすことができる。また、「着く」は非対格動詞なので、たとえ主語が人であっても意味役割は対象（Theme）となり、従って非意志性の動作となる。

(19) a　屋上カラ飛ビ降リテ死ンダ。（「手段））

b　屋上カラ落チテ死ンダ。（「原因」）

このうちａを自殺、ｂを事故死と感じることができるのは、すでに述べたように、ａの動詞が前件においても後件においても意志性の動作（どちらも非能格動詞）であり、ｂの動詞が前件においても後件においても非意志性の動詞（どちらも非対格動詞）だからである。手段と目的はどちらも意志を持って選ぶものであるが、原因と結果の関係の場合、我々は結果を意志的に選び取ることはできない。

(20) a　３時間歩イテ学校へ行ッタ。（「手段」）

b　３時間歩イテ疲レタ。（「原因」）

これは、前件はａ、ｂとも非能格動詞「歩く」であるが、後件はａが意志性の動詞、ｂが非意志性の動詞である。それ故、我々は(20) ａの「歩いて」を「手段」と判断し、(20) ｂの「歩いて」を「原因」と判断することができる。よって、テ形の用法の「原因」との判定は、後件動詞の非意志性に支えられていると言うことができるのである。

４．動詞分類における「付帯状態」の位置づけ

二事象の発生が全部、あるいは一部分重なり合い、前件が後件の修飾節という位置づけになると、「付帯状態」の用法になる。

(21) a　隠レテタバコヲ吸ッタ。

b　*歩イテタバコヲ吸ッタ。

上のａはまぎれもなく「付帯状態」の用法と判断できるが、ｂは「付帯状態」の誤用だと感じられる。（正しくは、「歩きながら」とすべきであろう。）しかし、「隠れる」も「歩く」も同じ非能格動詞[24]であるのに、なぜ文の正誤判定に差が出るのか。

これに関しては、Zeno Vendler（1967）の語彙的アスペクトによる動詞分類が有効かと思われる。語彙的アスペクトによる動詞分類は、わが国でも金田一（1976）が行っており、その対照は定説になっている。まず、両者の動詞分類を比較し、その問題点を論じる。

４－１．金田一の動詞分類とその問題点

金田一（1976）は、動詞を語彙的アスペクトにより、状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、特別動詞の四種に分類した。

この分類の問題点は二つある。

一つは、「落ちる」「（電気が）つく」などは「瞬間動詞」であるが、それらと有対の他動詞で同じく瞬間性を持つ「落とす」「つける」などはどこに位置させるのか、という問題である。

もう一つは、「変化動詞」をどこに位置づけるか、という問題である。この分類は、動作・作用の実現時間が軸にされているが、その中に「動作・作用の主体の変化」というもう一つの軸が滑り込まされている。具体的に言えば、変化動詞と瞬間動詞の関係が議論されていないのである。「テイルをつけると結果状態を表す」のは、動作・作用の実現後に動作主体または作用主体の様子が変化する「変化動詞」である。しかし、ここではその機能が動作の「瞬間」性に託されている。そうすると、「瞬間動詞」イコール「変化動詞」ということになるが、果たしてそうであろうか。例えば、「太る」「痩せる」

[24] 有対他動詞「隠す」に対応する自動詞は「隠れる」であり、これは「看板が木に隠れている」など、対象が主語になる。しかし、「隠れんぼ」などの「隠れる」という動作は、明らかに動作主が主語となるので、非能格動詞とみなす。

「乾く」等は瞬間にして実現する事態ではないが、テイルをつけると結果状態を表すのである。

また、「特別動詞」は、日本語特有の語彙事情による特殊な動詞と考えられるので、一般化はできないと思われる。

４－２．Zeno Vendler の動詞分類と本稿の捉え方

Zeno Vendler（1967）の語彙的アスペクトによる分類は、以下のようである[25]。

ａ．状態動詞（state verb）［状態、継続、未完］

金田一の「状態動詞」に該当。主語指示物の一定の状態が継続していることを意味する。

know, believe, love, have, exist, be broken[26]

ｂ．活動動詞（activity verb）［活動、継続、未完］

金田一の「継続動詞」に該当。主語指示物の意図的・継続可能な行為を表す。非有界の非能格動詞と対格動詞。

run, dance, swim, walk, drive a car, eat pizza, push a cart

ｃ．到達動詞（achievement verb）［瞬間、終結］

金田一の「瞬間動詞」に該当。ある状態に至る行為の完了点を述べる。非意志的であり、動作の開始点と終了点が同時である。非対格動詞のほぼ全般に当たる[27]。

arrive, learn, notice, find, die, break（自動詞）

ｄ．達成動詞（accomplishment verb）［継続、過程、終結］

金田一の分類にはないが、「瞬間動詞」の一部を含む。意図的に開始できる動作で、継続した動作の結果、必ずそれが完了する（到達点に至る）ことまで含む。「お茶を３杯飲む」「駅まで走る」など、目的語が量化された活動動詞も含まれる。有界

---

[25] Vendler（1967）の分類は、高見・久野（2002）、ｐ.18、および長谷川（2001）ｐ.160～161 による。

[26] 日本語の「持つ」「知る」「要する」等は、活動動詞になる。

[27] 厳密に言うと、非対格動詞イコール到達動詞ではないが、本稿ではその議論に深入りしない。

性を持つ非能格動詞と対格動詞。

teach, kill, break(他動詞), run to the station, eat a piece of pizza, make a chair, recover from illness, draw a circle, deliver a sermon

この分類が金田一と違っているのは、むろんｄ類である。動詞を目的語まで含めてアスペクトと捉えたのは、後に動詞の有界・非有界という議論に発展させられ、さまざまな言語現象を解明する上で大きく役に立っている（次節で例示)。「達成動詞」が設けられたことで、動作完成に要する時間の幅ということは解決されるし、「有対他動詞」は、「達成動詞」に属することになる。

しかし、この分類でもまだ解決されていないように見えることがいくつかある。

1）この分類では、ｃ．到達動詞では「非意志性・瞬間・結果変化」を要素として持ち、ｄ．達成動詞では「意志性・継続」を要素として持っていることになるが、では実現に時間を要する「太る」「痩せる」「乾く」などはどこに分類されるのか。

2)「変化動詞」をどこに位置づけるのか。

本稿では、以上の問題を次のように考える。

まず、1)である。「瞬間」という概念は「時間幅ゼロ」ということであるが、しかし、「瞬間」というのは動作完成までに要する時間のことではなく、動作の完成点そのものを指す。例えば「着く」という動詞は、目的地に到達するまでの所要時間を問題にしているのではなく、目的地に到着した瞬間（完結点）を持って初めて完成するのである。(100 メートル競走で、走者がテープを切る瞬間を考えればよい。）それ故、「太る」「痩せる」「乾く」も「太った」「痩せた」「乾いた」と言えるにはある「完成点」を持つはずである。それ故、「太る」「痩せる」「乾く」も「到達動詞」に属するものと考える。

次に 2)であるが、結果変化を伴う動詞は、「到達動詞」と「達成動詞」であると考えられる。意志を持ってなされる場合は「達成動詞」、非意志性の動詞なら「到達動詞」と分類される。「達成動詞」

の例を見るに、teach 、kill、break（他動詞）など、いずれも行為の結果、対象（または動作の相手）が変化しており、recover from illness は主体が変化している。また、目的語を量化した run to the station は、行為の後は主体の位置が変わり、draw a circle の後は描かれた円が出現し、deliver a sermon の後は鮭の様子が変わっており、eat a piece of pizza もピザが 1 切れなくなっているわけである。よって、「達成動詞」とは変化動詞であり、明確な変化を確認するからこそ「達成」感を伴うのである。「到達動詞」にしろ「達成動詞」にしろ、行為の結果の変化が認知されてこそ、完結点を持つことが確認されるのである。

以上の結果は、日本語のアスペクトの課題であったテイルの分類と筋目を同じくしている。こと日本語の動詞分類に関しては、金田一（1976）も着目しているように、テイルの示すアスペクトを意味素性にしないわけにはいかないであろう。

ａ．状態動詞［非意志・状態・未完］

テイルを付けることができない。

ｂ．活動動詞［意志・活動・未完］

テイルを付けると、動作の進行状態を表す。

ｃ．到達動詞［非意志・状態・完結］

テイルを付けると、結果状態を表す。

ｄ．達成動詞［意志・活動・完結］

テイルを付けた場合、動詞によって意味が違ってくる。

①再起動詞[28]は、結果状態を表す。

②目的語を量化したものは、特殊な意味になる[29]。

---

[28] 再帰動詞とは、「手を挙げる」「肩を落とす」など、動作の結果、動作主体の様子が変化する動詞である。テイルを付ければ、「手を挙げた結果の状態」「肩を落とした結果の状態」になる。この「再帰動詞」も、基本的には「達成動詞」に分類されてよいと思われる。

[29] 目的語が量化された動詞にテイルを付けて、「彼は、ピザを３切れ食べている。（？）」「彼は、駅まで走っている。（？）」とするのは、進行状態を表す文としては変である。完結点が見えないというアスペクトのテイルと、完結点である「３切れ」「駅」という完成点を示す付加語は矛盾する。進行状態を表したいなら、「彼は、ピザを３切れ食べることに挑戦している。」「彼は、駅に向かって

③その他の動詞は、特殊な動作の進行状態を表す[30]。

以上、Vendler の四種の動詞の意味素性を、次のようにまとめる。

	状態動詞	活動動詞	到達動詞	達成動詞
完了性（非継続性）	－	－	＋	＋
運動性（非状態性）	－	＋	－	＋
意志性	－	＋	－	＋
変化の結果	－	－	＋	＋
テイル付加可能性	－	＋	＋	（＋）

４－３.「付帯状態」とその誤用

(21) a　隠レテタバコヲ吸ッタ。

b　*歩イテタバコヲ吸ッタ。

本稿の動詞分類によれば、(21)の a「隠れる」は再帰動詞[31]（達成動詞の一種）、b「歩く」は活動動詞である。再帰動詞とは、動作完了後の主語名詞の様態が動作前と違うという動詞であった。つまり、動作完了後には、動作の結果を帯びている。先行動作の結果を帯びた状態であるから、a では「付帯状態」の用法が成り立つ。しかし、活動動詞はいつまでも動作を続けるわけであるから結果を持たず、完了を示すテ形に接続すると「継起」か「並列」の意味になり、原則として「同時進行」を表すことはない。(「同時進行」を表

走っている。」などと、完結点をぼかすような表現が必要であろう。

しかし、「彼は、昨年の早食い大会で、１分間でピザを３切れ食べている。」「彼は、マラソン大会で完走できなかったが、駅までは走っている。」など、過去を表す付加語を加えれば「記録」のテイルと解釈することは可能であろう。

[30] 「落とす」「つける」にテイルをつけて、「彼は今、柿の実を落としている」「彼は今、電気をつけている」とすると、「たくさんの柿の実を落としている」「たくさんの電気のスイッチを１つ１つつけている」という反復性の動作か、「とても落としにくい柿の実を落とすべく挑戦している」「とてもつけにくい電気をつけるべく挑戦している」という様子が思い浮かぶだろう。また、これらの動詞を「活動動詞」に入れることもできるかもしれないが、やはり動作の完結性ということを考えると、「達成動詞」に属すると考えた方がいいと思われる。

[31] 再帰動詞とは、形式的には「自分の体の一部に働きかけて、自分の体の一部を様態変化させる」ということである。つまり、動作終了後には、動作主も対象も変化する、という特殊な動詞である。「隠れる」は、「身を隠す」と言い換えられる故、再帰動詞と判断した。

したければ、ナガラを用いなくてはならない。）そこで、ｂは非文になるのである[32]。

５．動詞の有界性の問題—「結果」と「原因」の連続性

前節で述べた動詞の分類に於いて、もう一つ重要なカテゴリーがある。それは、動詞の有界性（telic）・非有界性（atelic）という概念である。動作の終結点を持つ動詞を「有界動詞」、終結点を持たない動詞を「非有界動詞」と言う。

Vendler（1967）の動詞分類では、到達動詞は［完結・主体変化］の相を持つ有界動詞であったが、活動動詞は［活動・未完］の相を持つ非有界動詞であった。しかし、活動動詞であっても、目的語を量化することによって有界性を獲得することができるのであり、量化された目的語を持つ活動動詞は、達成動詞と呼ばれるのであった。それは、到達動詞と同様、期限を表す副詞「１時間で」と共に使うことが許されることからもわかる（長谷川（2001）ｐ.161 から採集）。

(22) a　*このナイフは１時間でよく切れる。（状態動詞）

b　荷物が１時間で届いた。（到達動詞）

c　*悠太が１時間で泣いた。（活動動詞）

d　涼子が一軒の家を１時間で建てた。（達成動詞）

ａ、ｃが非文になるのは、状態動詞と活動動詞が非有界動詞であるからである。

前節の(21)ｂ、

(21) b　*歩イテタバコヲ吸ッタ。

は、「付帯状態」としても「継起」としても不安定な文であるが、前件動詞に有界性を与え、

(21') b　３時間歩イテタバコヲ吸ッタ。

とすることによって、「３時間歩いた後でタバコを吸った」という「継起」の読みが自然になる。これは、

32 「付帯状態」のテはかなり複雑な細分化が必要なので、稿を改めて論ずる。

(21) c　駅ニ着イテタバコヲ吸ッタ。

とアスペクト的には同値であり、有界動詞である到達動詞を前件に持つ文が自然であるのと同様である。それは、前件動詞が有界的である方が、「一つの行為が完了して、もう一つの行為が続く」という「継起」の性質がより発揮されるからである。

この原則は、一見して判別しにくい「原因」の用法と「結果」の用法を区別することにも役立つ。前節で見た例、

(20) b　３時間歩イテ疲レタ。(「原因」)

c　３時間歩イテ学校ニ着イタ。(「結果」)

の場合、ｂとｃの後項は、いずれも非意志性の動詞である。それなのに、我々は前者を「原因」、後者を「結果」と捉えてしまう。何故なら、前者はカラ・ノデで言い換えることができるが、後者はその言い換えは大変不自然だからである。

(20”) b　３時間歩イタノデ疲レタ。

c　?３時間歩イタノデ学校ニ着イタ。

これは、どういうわけであろうか。

(20) c　３時間歩イテ学校ニ着イタ。

という文は、

(20”’) c　歩イテ３時間デ学校ニ着イタ。

という文と真理値的には等価の文である。これは、

(23)　歩イテ 15 分クライカカル。

という、代表的な「結果」の用法の文が、

(23’)　15 分クライ歩イテ着ク。

と等価なのと同じことである。

それ故、テ形の「結果」の用法は、「前件動詞が有界的でなければならない」という制約があることがわかる。これに対して、「原因・理由」の用法は、前件動詞の有界・非有界を問わない。何故ならば、(20)の例文の前件動詞から有界性を取り外して、

(20”’) b　歩イテ疲レタ。(「原因」)

c　?歩イテ学校ニ着イタ。(「結果」)

とするならば、ｂは不自然ではないが、ｃは何となく座りが悪い文になるからである。

(24) a　アノ会社ニ入ッテ、失敗シタ。

b　アノ会社デ仕事ヲシテ、失敗シタ。

のうち、ａは「あの会社に入ったこと自体が失敗であった」という読みが強いが、ｂは「あの会社で何か仕事上の失敗をした」という読みの方が強い。「会社に入る」は有界動詞だが、「仕事をする」は非有界動詞だからである。この際、ａは「結果」、ｂは「原因」の用法と判定できる。ａは、

(24') a　アノ会社ニ入ッテ、失敗ダッタ。

という、体言述語に換えることができるのである。このことは、何を意味するか。前件がいずれも有界動詞である(24)を見てみよう。

(25) a　アノ女ト結婚シテ、失敗シタ。(「結果」)

b　アノ女ト結婚シテ、事業ニ失敗シタ。(「原因」)

ａは「自分が何かに失敗したのは、あの女と結婚したからだ」という「原因」の意味には受け取れず、「あの女と結婚したこと自体が失敗だった」と、「結果」の意味にしか受け取れない。「あの女と結婚したこと」が「何かの失敗の原因である」、というふうに理解させるには、ｂのように「事業に」「マイホーム作りに」など述語を限定する付加詞が必要である。その証拠に、ａは体言述語に変えることができるが、ｂはできない。

(25') a　アノ女ト結婚シテ、失敗ダッタ。

b　*アノ女ト結婚シテ、事業ニ失敗ダッタ。

即ち、「結果」の用法というのは、「前件事象の丸ごと評価」なのである。「前件事象の丸ごと評価」をするためには、前件は有界的でなくてはならないであろう。それ故、森田（1988）の言うように、「結果」の用法には、

(26)　日本ニ来テモウ３年ダ。

のような体言述語が多い（p.318）のも、体言の方が評価述語を作りやすいからであろう。前件を体言述語で受けることで、前件事象

を丸ごと受け止める姿勢が表明されていると見られるのである。

ここで我々は、前節で述べた「継起」の用法に、今一つの制約があることに気づく。それは、「前件事象の有界性」ということである。それ故、常識的・語用的に前後関係が決まっていて「項補充作業」が必要でないテ形文であっても、「前件事象の有界性」という制約だけは働いているのである。

(27)　*歩いてバスに乗った。

は、前件動詞が非有界・活動動詞の「歩く」である故、非文になるが、動作を量化して、

(27') a　駅まで歩いて、バスに乗った。

b　15 分歩いて、バスに乗った。

とすれば、何ら問題はなくなるからである。

それ故、「継起」の用法を支える条件とは、「前件事象と後件事象の不可逆性」、「項補充作業」が行われ得ることに加えて、「前件事象の有界性」、これが自然から言語に投影された制約である。

６．語彙概念構造―「並列」と「原因」の連続性

唐突であるが、70 年代後半に日本ではやった「年下の男の子」[33]という歌を紹介したい。

(28)　（前略）

ボタンのとれてるポケット　汚れてまるめたハンカチ

あいつはあいつはかわいい　年下の男の子　（後略）

（作詞：千家和也　作曲・編曲：穂口雄右　歌：キャンディーズ）

下線部のテ形文の二つの述語は、「ハンカチ」を形容するために並べられたのであるから、用法としては「並列」である。等位構造であるから、順序を逆にして「まるめて汚れたハンカチ」にしてもよさそうである。しかし、筆者が日本人十数人に聞いたところ、すべ

[33] 1975 年 2 月リリース。

ての人が「汚れてまるめた」の方が自然だと言い、「まるめて汚れた」の方が自然だという人はいなかった。これは、何故であろうか。

ここで用いたいのが、これらの動詞の語彙概念構造である。先の Perlmutter や Vendler の動詞分類に従った各動詞の概念構造を示すと、次のようになる[34]。

a．対格動詞　：[x ACT ON y (CAUSE [BECOME [y BE AT-z]])]
　　（到達動詞の場合は（CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]）を含む）
b．非能格動詞：[x ACT]
c．非対格動詞：[BECOME [y BE AT-z]]
d．能格動詞　：[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]
　　または、[BECOME [y BE AT-z]]

a．状態動詞：[y BE AT-z]
b．活動動詞：[x ACT (ON y)]（対格動詞の場合は、(ON y) を含む）
c．到達動詞：[BECOME [y BE AT-z]]
d．達成動詞：[[x ACT (ON y)] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]
　　（対格動詞の場合は、(ON y) を含む）

上記の「汚れる」は非対格動詞で到達動詞、「丸める」は対格動詞で達成動詞であるから、語彙概念構造は以下のようになる。

(29)　汚れる：[BECOME [y BE AT-z]]
　　（y：ハンカチ　z：汚れた状態）
　　丸める：[[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]
　　（x：年下の男の子　y：ハンカチ　z：丸まった状態）

影山（2001）は、自動詞の下位分類として、「脱使役化」と「反使役化」という概念を提唱している。例えば、日本語の「折れる」のような有対自動詞の場合、「枝が折れた」は「何かが枝を折った」という外力の結果状態を表すだけでなく、枝の自発性（枝自身の老化などの内在的コントロール）が「折れる」という概念にも認めら

[34] 語彙概念構造の研究は生成文法、認知言語学の間で現在盛んに進められていて、表し方は一様ではない。本稿の表記は、長谷川（2001）による。

れるので、「折れる」を「反使役化」としている。それに対して、「(折り紙で）鶴が折れた」などは外力しか持たぬ故、「脱使役化」としている。この考えに従えば、(29)は以下のように書き換えられる。

(29’)　汚れる：[[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]
（x：年下の男の子　y：ハンカチ　z：汚れた状態）
丸める：[[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]
（x：年下の男の子　y：ハンカチ　z：丸まった状態）

それ故、「汚れてまるめた」と「まるめて汚れた」では、句の概念構造が違ってくる。

(30)　汚れて→まるめた
[[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]
→ [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]

(31)　まるめて→汚れた
[[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]
→ [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]

(29’)に見る通り、「汚れる」の語彙概念構造では、意味述語の原因の部分が伏せられたままである。そこで、(30)のように配置すると、前件「汚れて」の意味述語の結果部分（[BECOME [y BE AT-z]]）の次に、新たに後件「まるめた」の意味述語の原因部分（[x ACT ON y] CAUSE）が来るので、後件で新しい事態が始まったことが認識でき、前件と後件が関連なく並べられた「並列」と認知できる[35]。

これに反して(31)の配置では、後件動詞「汚れた」の原因部分（[[x ACT ON y] CAUSE）は伏せられたままであるので、前件動詞「まるめて」の原因部分（[x ACT ON y] CAUSE）が「汚れた」の原因部分であると認知されてしまう。そうなると「並列」であるとは認知できず、「まるめたから汚れた」という「原因」の読みが成立するのであるが、我々の背景知識として「まるめる」ことは「汚れる」こと

[35] むろん、「汚れてまるめた」は「ハンカチ」を底名詞とする名詞修飾節の中にあるので、「並列」ではなく「汚れたからまるめた」という「原因」の読みも可能である。これは「起因的継起」のテ形の問題になるが、稿を改めて論じる。

の原因にはならない。そこで、(31)はどことなく不自然だと感じてしまうのである。

「原因」と「並列」の間には、以上のような語彙概念構造の相違が潜んでいる。同時に我々は、以上の語彙概念構造の分析から、「原因・理由」のテ形文を作るには、後件の動詞が何故非意志性でなければならないかという事情も理解できるであろう。

7．終わりに

以上のことを整理する。

① テはもともと完了のアスペクトを含んでいる。それ故、「継起」の用法がテ形のすべての用法の基本と考えられる。「継起」の用法は、前件事象が終わって後件事象が始まることを表すので、前件動詞・後件動詞とも意志性の場合は、前件動詞は有界動詞でなければならない。また、前件事象と後件事象の語用的（または統語的）な連続性がなくてはならない故、前件事象と後件事象が不可逆的でなければならない。自然事象の場合は、時間系列の中におのずから不可逆性が保証されているが、人為的行為の場合は、「項補充作業」が可能になるものでなければならない。

② 「並列」の用法は、前件と後件が語用的に何も連関がなく、前後を入れ替えても意味が変わらないことが必要である。

また、前件と後件の動作主やテーマが対称項になっている場合（「男」と「女」、「天」と「地」等）、「対比」の読みができることがあるが、これはあくまで「並列」の変種と考えられる。

③ 「付帯状態」とは、相前後して継起する二事象が時間的に重なり合っているものである。前件が必ず結果を残す動詞である。

④ 「原因・理由」とは、「継起」の用法に特殊な統語的制約が加わって、因果の読みができるようになったものである[36]。後件は、

[36] それ故、仁田（1995）に倣って、「継起」を二分し、従来の「継起」を「時間的継起」、「原因・結果」を「起因的継起」と呼ぶのが適当であろう。また、「原因・理由」の用法は、「付帯状態」の一種と考えられることもあろう。

非意志性の述語でなければならない。

「逆接」とは通常の因果とは逆の読みができる（「原因・理由」はテをカラで言い換えることが可能であるのに対し、「逆接」はテをノニで言い換えることが可能）という、いわば「起因性」を裏から見た用法である。

「手段」とは、前件も後件も意志性の述語を有する場合であるが、これは仁田（1995）も言うように、「方法的起因」として「起因的継起」の一種と考えられる。

また、「原因・理由」の用法のうち、前件が有界動詞で後件が評価的な述語の場合、「結果」の読みになることがある。

しかし、「逆接」「手段」「結果」は有標の用法なので、独立した用法とは認められず、「原因・理由」の派生的用法と位置づけたい。

以上のことから、次のような用法の系統が示される。（斜体字は派生的用法を示す）

「並列」:「継起」の①②③の条件を取り払ったもの。

「対比」:「並列」の中で、前件と後件のテーマが対称項のもの。

「継起」: ①前件と後件が不可逆的である。

②前件が有界性である。

③前件と後件が同一主体である。

「原因・理由」: 前件と後件が因果関係。後件は非意志性の述語。

「手段」: 方法を原因の一種と考えた場合。後件は意志性述語。

「結果」: 前件が有界的、後件が評価的な述語の場合。

「逆接」: 文脈上、「原因－結果」とは逆の読みができるもの。

「付帯状態」: 前件と後件の生起時間の一部または全部が重なっている。前件は達成動詞か、反復性の活動動詞[37]。

［テ形節と主節の関係］

等　位　構　造 ←――――――――→ 従　属　構　造

「並列」◄---「継起」----------►「原因・理由」---►「付帯状態」

[37] 「付帯状態」の条件については、稿を改めて論じたい。

「並列」は完全な等位構造。右に進むほど、従属度が高くなる。

以上、テ形は「継起」を中心として、前件と後件の統語条件が変わるにつれ、さまざまな用法の「読み取り」が可能になることがわかった。読み取られた用法にある一定の統語規則が確認されれば、我々はそれをカテゴライズして命名する。

分類というものは、アド・ホックに発見されるものでもなければ、細かければ細かいほどいいというものでもない。分類の基準をはっきりさせ、一定の方法に基づいて行うことが肝要なのである。

［参考文献一覧］（五十音順）

影山太郎「文法と語形成」東京、ひつじ書房、1993
影山太郎「動詞意味論―言語と認知の接点」東京、くろしお出版、1996
影山太郎・由本陽子「語形成と概念構造」中右実編「日英語比較選書８」東京、研究社出版、1997
影山太郎「日英対照　動詞の意味と構文」東京、大修館書店、2001
北原保雄「日本語文法の焦点」東京、教育出版、1992
金田一春彦「日本語動詞のアスペクト」東京、むぎ書房、1976
久野暲「日本文法研究」東京、大修館、1983
高見健一・久野暲「日英語の自動詞構文」東京、研究社、2002
寺村秀夫「日本語のシンタクスと意味Ｉ」東京、くろしお出版、1987
仁田義雄『再帰動詞・再帰用法』「日本語教育 47 号」東京、日本語教育学会、1982
仁田義雄「日本語のヴォイスと他動性」東京、くろしお出版、1991
仁田義雄編「複文の研究（上）」東京、くろしお出版、1995
バーナード・ブロック著、ロイ・Ａ・ミラー編、林栄一訳「ブロック日本語論考」東京、研究社、1975
長谷川信子「生成日本語学入門」東京、大修館書店、2001
益岡隆志・田窪行則「基礎日本語文法」東京、くろしお出版、1992
益岡隆志編「日本語の条件表現」東京、くろしお出版、1993
森田良行「基礎日本語２」東京、角川書店、1988
渡辺実編「副用語の研究」東京、明治書院、1983